宗教と人生（二）

「宗教と人生」（二）　みちしるべ文庫　４２
二〇〇六年十一月三十日　発行

著　者　松　下　昌　義
発行所　左京キリスト教会
　　京都市左京区下鴨南茶の木町二九
印　刷　片桐軽印刷（有）

目次

この世と人間……1
だれもが不安を持っている……4
人は安心を求めている……5
何が本当に大切なことか……5
イエスの言葉……6
イエスに学ぶ大切な一点……8
宗教とは「こころ根」の教え……8
「宗教」についての誤解……10
宗教及び神の位置……11
イエス・キリストへの関心……15
イエス・キリストの生涯……16
イエスが証示したこと……18
宗教は道徳ではない……21
聖書は道徳の書ではない……23
聖書は命令の書ではない……25

イエスは「創造における自然」を示された　……27
「創造に於ける自然」とは　……28
万物は生かそうとする配慮の基にある　……29
「思い悩むな」ということ　……31
問題は「自我」にある　……34
父親と二人の息子の話　……40
イエスは譬えによって語られた　……42
「譬え話」の受け取り方　……44
神と人間との関係　……45
命にすぎたる宝なし　……47
魂とは何か　……48
肉体と魂(心)　……49
「身体」は念(おも)いの固まり　……50
霊の働き　……51
霊とは何か　……53
霊(プネウマ)は創造的な働き(デュナミス)と力　……54
使徒達の場合　……62
霊(プネウマ)の働きは創造的な力(デュナミス)と智慧(ソフィア)　……64
啓示(けいじ)と理性　……69

パウロの場合　……69
イエスの場合　……70
イエスとパウロに共通なるもの　……71
「心を貧しく」するとは　……74
「心を貧しく」して行くと何が見えるか　……76
さらに見えてくること　……78
聖霊体験は理性の否定排除のことか　……80
聖霊体験が生み出すこと　……81
聖霊体験は人間の何を更新させるのか　……85
イエスと人々との立脚点の違い　……87
第一の世界と第二の世界　……90
もう一つの出来事　……93
さらに、もう一つの出来事　……98
言葉の出所の違い　……100
群衆や弟子の言葉の出所　……101

第二分冊　目次

イエスの言葉の出所　……107
何にも依存しない　……109
本当の拠り所とは　……112
単純で明解な人生の事実　……115
樹を見る　……116
目に見えるものと見えないもの　……117
「宗教」とは　……120
岩の上に建てられた家　……122
岩は初めから足元にある　……123
この世の意義　……127
生きる秘訣　……129
自分を捨てるとは　……130
「自分」について考える　……131
自我と自己　……132
本当の自分を求めて　……136

再び「自我と自己」について　……138
なぜ自我と自己か　……143
パウロに於ける自我と自己　……144
パウロの直接経験と贖罪信仰（一）　……149
パウロの直接経験と贖罪信仰（二）　……157
パウロの直接経験と贖罪信仰（三）　……163
パウロの直接経験と贖罪信仰（四）　……171
パウロの直接経験と贖罪信仰（五）　……177
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰（一）　……184
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰（二）　……190
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰（三）　……198
贖罪の意味―罪の放棄と克服―（一）　……204
贖罪の意味―罪の放棄と克服―（二）　……211
贖罪の意味―罪の放棄と克服―（三）　……217

第三分冊　目　次

自我より深い大いなる命の営み
律法主義の魔
よくよく見なさい
思い煩うな
イエスが証示する神
あとがき

イエスの言葉の出所

イエスの言葉は自我を超えた無我の世界から出て来た言葉です。自我を成り立たせている根源の世界を神の命のたぎりと言うなら、イエスの言葉は神の命のたぎりから出てきた言葉です。また、自我の命の故郷から生まれてきた言葉がイエスの言葉です。ですから、ただの自我レベルでイエスの言葉を聞く者には、非現実的な言葉、理想主義的な言葉、たんなる美しい言葉、人間の有るべき倫理的な言葉のように聞こえてしまうのです。

イエスの言葉は、聞く者の心の芯に届き、いつまでも残ります。次の言葉もその一つです。

「目には目を、歯には歯を」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら左の頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて、下着きを取ろうとする者には、上着をも与えなさい。もし、だれかが、あなたを強いて一キロ行かせようとするなら、その人と共に二キロ行きなさい。求める者には与え、借りようとする者を断るな。……

「隣り人(味方)を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。……

「姦淫するな」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わた

しはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。……

―マタイによる福音書五章二七節以下―

〝たしかに、これは善い教えだ。しかし出来ない〟と誰もが思う。とすると、イエスは誰もがそのように願っているが、出来ないことを行え、と教えたのだろうか。

このイエスの言葉についてさまざまな受け取り方がなされてきましたが、そられに共通していることは、〝人間として為さねばならない高度な倫理〟だとしていることです。その立場からの解釈の一つが、人間の有るべき聖(きよ)い生き方、高度な倫理の提示によって、それを聞いた人が自分の不完全さ、罪深さに気づき、罪の赦しを得るために、イエス・キリストによる罪の贖(あがな)いとしての十字架を仰ぎ、救いにあずかるためである、という受け取り方です。しかし、この解釈は「福音と律法」という立場からのパウロ的・ルター派的なものであって、イエスご自身の思いとはかけ離れていると思います。とにかく、イエスの言葉は一般に社会で正しいと認められている判断に基づく倫理、即ち「自我に妥当する社会的規範」としての倫理ではありません。

「出来るか、出来ないか」「守れるか、守れないか」守れず、出来なければ罪人。守り、出来れば義人。という図式は自我レベルの論理であって、イエスの提示する世界はそのような自我からの提示ではありません。したがって、人が「出来ない自分で」悩み、出来ていないのに出来ているかのように言動する自分の偽善に苦しむなら、それは、およそイエスの思いからかけ離れているといえるでしょう。否、むしろイエスは「出来る、出来ない」という自我が構築する律法主義からの人間の解放を提示されたのです。ではイエスの言葉の出所はどこなのでしょうか。また

イエスは何を提示したのでしょうか。

何にも依存しない

律法主義的な生き方とは、神の言葉である律法(旧約聖書)を唯一の確かな拠り所とすることで安心を得ようとすることです。イエス当時のユダヤ教はそのような律法主義体制で固まっていました。つまり彼らは律法(の文字)を守ることで自分達の永遠の命（救い)の保証としたのです。このようなユダヤ教の指導者に対してイエスは次のように言われました。

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書(旧約聖書)を調べている。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。

―ヨハネによる福音書五章三九節―

「聖書はわたしについて証しをするものだ」とイエスは言われた。「わたし」とは、神の創造的な命のたぎり、即ち、神の支配のことであります。とすると、「律法」とは神の支配、即ち、神の創造的な命のたぎりそのものが、この世でとる形だと言えます。その意味で律法を通して私たちは、神の支配、即ち、神の創造的な命のたぎりが、どのようなものであり、人はその創造的な命に生かされており、その命に自覚的に生きるとき、真っ当な自我となり、人は人となることに気づくのです。律法(聖書)の本来の意義はそこにあるのです。

にもかかわらず、ユダヤ教の指導者達は律法の言葉が何処から発して、何を示しているのかということを知らないままで、ただ律法（聖書）の文言を即神言とすることで絶対化し、それを自分達が永遠の救いに与かるための唯一の規範、基準、または手段とし、その文字に依りすがり、文字の指示どおりに従うことで安心を得ようとしたのです。その結果、彼らは〝律法の文字〟で自分自身を縛ってしまったのです。これが、律法主義、聖書主義の落とし穴です。この誤りを見抜いたのがイエスです。

神の創造的な命の働きが抜け落ちた〝律法の文字面〟で人間の生き方を縛ってしまうなら、それがどれほど熱烈な生き方であっても、それは虚しいものを確かなものとして依りすがる自我（自分）の思い込みであり、覚めればただの自己満足であったことに気づくのです。だからこのことに気づいたパウロは次のように言った。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい知識（深い洞察）に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

―ローマの信徒への手紙一〇章二節以下―

イエスはこの世の何かを絶対的な規範又は依り所として言動されない。「あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している」とイエスは言われる。（ヨハネ八・二三）

「この世に属する」「下のものに属する」とは、自我として生きていることです。「自我は社会的に共通し承認されている規範に基づき言動しているふつうの人間」のことです。しかし、一

方この世が不安定であるように自我も不安定でいろいろと思い悩みを持っています。そこで、この世の何かに依り頼むことによって自分を守り生かそうと計らいます。それがお金であったり、権力であったり、武力であったり、神や仏を立てる宗教であったり、その様子はさまざまです。こうして自我は「自分の存在の価値を確保」したいと賢く(知的に)懸命に努力し、他者と競い、ときに争い、ときに排除し、場合によっては他者を抹殺して生きている。このような人間(自我)の生きざまをイエスは「あなたがたはこの世に属している」「下のものに属している」と言われたのです。その意味で、イエス当時の熱心なユダヤ教の人達が律法の文字を即神の言葉となし、その文字を唯一の拠り所として自分の救いの保証を得ようとした生き方は、一見、熱心な宗教的求道の姿のようであっても、その実、それは自我に基づくこの世的な努力なのです。この事を見抜いたパウロは、その熱心は「正しい知識(深い洞察即ち神の支配)に基づくものではない」と断言した。イエスは次のように言われた。「『主よ、主よ、(神よ、神よ)』と言う者が皆、神の支配に入るわけではない」と。(マタイ七・二一以下)つまり、自我の立場から神よ、神よ、と熱心に求めても、神の支配に開眼はできませんよ、ということです。

とすると、自我とは、本当の拠り所を知らないままで自分を自分として立てようとする自分のことだと言えます。たしかに、このような自我は歪(ゆが)んでいる。

本当の拠り所とは

イエスは「この世」を超えたところに立って「この世で」言動しておられる。"「この世」から「この世」に向かい「この世」で言動する"のが自我だとすれば、そのように言動する自我を捨てなさい、とイエスは言われる。そしてそのような自我を捨てるとき、自我は本来の真っ当な自我に成るのだ、と。

イエスは弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者はそれを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら何の得があろうか。自分の命を買い戻すのにどんな代価を支払いえようか。

―マタイによる福音書一六章二四節以下―

自分の持ち物を捨て切らないならばあなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。

―ルカによる福音書一四章三三節―

はっきり言っておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、こ

の世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。

―ルカによる福音書一八章二九節―

イエスはこの世的な自我、即ち歪(ゆが)んだ自我の徹底否定を促される。その時、人は自我を支えて、必ず完成する本当の創造的な命、即ち「神の支配」に開眼すると同時にその命に自覚的に生かされる者とされるのです。

その生をイエスは「幸いだ！心の貧しい者は、神の支配はその人たちのものである」と示された。（マタイ五・三）

「神の支配」とは〝神の創造的な働きその事〟であって、私（自我体）の存在の究極的な根柢としての命のたぎりなのである。イエスはこの創造的な命のたぎりその事を生き、そこから言葉しておられる「わたしは上のものに属している」とはそういう在り方の事です。その意味で、イエスの言行はまさに創造的な命のたぎりそのものが地上に表れた事（キリスト）であると言えます。

このような創造的な命のたぎり、即ち神の支配をイエスは全身で提示されたが、その一つが次の譬え話しです。

神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そして穂には豊かな実が出来る。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

―マルコによる福音書四章二六節以下―

神の創造的な命のたぎり即ち神の支配は、人間の一切の自我の計らいとは関係なく「ひとりでに」それ自体の創造的な命の営みとして完成し成就して行く、とイエスは言われる。一切の存在に先立って既に神の命のたぎりがある。それは歴史を超えて歴史を抱えており、そこで創造的な命を芽吹かせる。その意味で、神の支配は「ひとりでに実を結ばせる。まず茎、次に穂……」のように具体的な現象としてある。しかし一方、「神の国は見える形では来ない」どのような形であっても対象的な存在として「ここにある」「あすこにある」というものではない。では何処にあるのか。神の国はあなたがたの中にある」(ルカ一七・二〇以下)とイエスは言われる。「中にある」とは、人間の本当の命の芯(主体)として創造的にたぎっているということです。ということは限りなく自我を本来の自我へと生成する創造的な力の場として命しているということです。だから「神の支配は言葉ではなく力である」とパウロは言ったのです。(コリントⅠ四・二〇)その力に開眼し、与かった者は、日常的生において神の支配(創造的な命)に参与する者として、矛盾と不条理に満ちた世に在るにもかかわらず、既に解き放たれた自由人として生かされるようになる。そのとき、その人には死も生も善も悪も無い。救いも滅びも無く、神も仏も無く、男も女も無くなるのです。まさに現実がそのまま神の支配の有り難き場に包まれていることに開眼する。ここに「思い悩むな」というイエスの世界がある。(マタイ六・二六以下)

単純で明解な人生の事実

イエスは次のように語られた。

どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、「どうしよう、作物をしまっておく場所がない」と思い巡らしたが、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えが出来たぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と」しかし神は、「愚か者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったい誰のものになるのか。」自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。

―ルカによる福音書一二章一三節以下―

「愚か者よ！」と神は金持ちに言われた。その意味は〝深く考えない者よ！〟ということです。つまり、〝あなたは思慮無き浅薄な人間だ！〟と言われたのです。

彼は、自分の人生は自分の知恵と努力で自由に操ることが出来ると思い込んでいます。それが自我体なのだが、そのように思って生きていることが〝愚かだ！〟というのです。

人間は、他の動物と違って、何事についても考えることが出来、必要に応じてものを造り、自

分の外のことについてだけでなく、自分自身について思いめぐらし自覚的に生きる事が出来ます。ですから、人間は万物の霊長であり、人間以上に偉いものはいないと思い込んでしまいました。つまり、人間の主人は人間であり、自分の主人は自分である、と確信する〝ただの自我体〟になってしまったのです。そこで、何事をするにも、自分を先立てて考え、行動するようになり、そのように生きることが当然のようになってしまった。

しかし、人間はだれでも、自分で生きているのではなく、生かされている者です。このことは単純で明解な自分についての事実なのですが、その事実に人はなかなか気づきません。何故でしょうか。それは、自我の底、命の深みの事であり、自分の存在の根っこのところで明らかになることだからです。自我体は自我の根柢を見失っている。このことは、樹木を見ると少しは理解できます。

樹を見る

人は、樹を見るとき枝や葉や花や実などに注目します。しかし、その樹には根っこがあり、その根によって樹全体が支え生かされていることには直ぐに気づきません。その理由は、根は地の中の深くにあって見えないからです。つまり人は、見える部分に注目しても、見えない部分には無関心なのが一般のことです。

秋になり葉が散り、冬には全く枯れ枝のようになる落葉樹を見て、人は、その樹が〝枯れてし

まった“とは思いません。そのように思うのは落葉樹のことを知らない人です。落葉樹でなくても、根がしっかりとしている樹なら、たとえ葉が虫に食われてしまい、また枝が風で折れたとしても、然るべき時が来れば、その樹は葉が芽吹き、枝が茂り、花が咲き、実がなるでしょう。樹木にとって、見えない根っここそ、大切なのです。ですから、このような樹木の根になぞらえて、ものごとの大切な部分を「根本」と言い、本当の支えのことを「根拠」「根源」「根柢」などと書くのは誰もが知っている事です。

軽薄で浅薄。または目先のことしか見ない貧欲で軽率な人。さらに現代社会の中で日々の仕事に忙殺されている人達は、自分自身の存在について、自分の人生について、自分の命について……根深く見つめて、考えようとはしませんし、考える余裕が持てません。しかし、目に見えるものを超えて、見えない根っこのところに思いを向けるなら、世界や人生の深さと広さの不思議と有り難さが分かるだけでなく、自分の人生をどのように生きれば善いのかということも理解できるようになるのです。つまり、見えない根っこの命の世界が了解されてくると、見える幹や枝や葉や花実の素晴らしさが一層に身に沁みて分かってきます。その意味で、ものごとの見えないものに目を注ぐことはとても大切なことです。

目に見えるものと見えないもの

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去ります

が、見えないものは永遠に存続するからです。　　―コリントの信徒への手紙Ⅱ四章一八節―

と使徒パウロは言います。彼は「目に見えるものは過ぎ去って行くものだから〝つまらないものだ〟」と言っているのではありません。そうではなくて彼は、目に見えるものは過ぎ去って行くものだ、とその事実を指摘しているのです。それが善いか悪いか。価値あるものか、価値無きものなのかということを論じているのではありません。ですから、彼は目に見えるものについて次のように語っています。

世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性とは被造物(目に見えるもの)に現れており、これを通して神を知る事が出来ます。

―ローマの信徒への手紙一章二〇節―

パウロは〝目に見えるもの〟の素晴らしさは、目に見えない神の永遠の力と神性を現していることにある、と言います。

目に見えるものは、過ぎ去るから価値無きものなのではありません。そうではなく、目に見えるものは、永遠なるものではなく必ず過ぎ去るものとして、それ自体あるものです。言わばそのものの性質であり個性なのです。しかし、過ぎ去るものとしてある〝目に見えるもの〟は〝目に見えない「神の神性と力」〟の現れとしてあることによって〝目に見えるもの〟の存在理由とその素晴らしさとを際立(きわだ)たせるのです。

とすると〝目に見えるもの〟の世界で、自分自身も〝目に見えるもの〟として生きている私たちが、しっかりと心得ておかなければならないことは、目に見えるものに於いて、又は目に見える者として、目に見えないものを見出し、目に見えない命に私たちが目覚めることであると言えます。

しかし、人は〝目に見えるもの〟を〝ただの目に見えるもの〟として関わり、それを自我の利益と欲望との対象として、目に見えるものとしての自我の内に取り込み楽しみ自己満足するだけ、とするなら、それは本当に、目に見えるものの世界に生きたことにはなりません。つまり、そのような人生は、消えて無くなるものに、消えて無くなる自我が、少しの間関わった幻想にしか過ぎなかったことになる。せっかく目に見える世界へ目に見える者として置いてもらったのに、飲み食いしただけ、あくせく働いただけ、虚しく歳をかさね、何がなんだか分からないままに苦労して、あげくのはては、寂しく消えて無くなるだけということなら、人生をもったいなく過ごしたことになります。

イエスは、この世の目に見えるものだけにしがみついて、それだけに依り頼んで生きている人を「愚か者！」と言われた。それは、〝ただ目に見えているもの〟だけに目を注ぎ、〝目に見えているものの根っこ〟である〝目に見えない、霊的で永遠的、神秘的なもの〟を深く洞察しない愚かを指摘されたのです。そして、その目に見えないものに目を注ぐことを「宗教」と言うのです。

「宗教」とは

「宗教」の「宗」とは、漢字辞典によると「本源」「大本（おおもと）」と説明しています。ある学者は「心根（こころね）」のことだと、私に教えてくださった。つまり「宗教」とは「本源の教え・大本の教え」「心根の教え」だというのです。この説明は〝目に見えないものに目を注ぐ〟ということと同じです。樹を見て、見えない根っこを見るということと同じです。とは言え、世間の宗教が必ず「根っこ」に目を注ぐのでなく、見える花や実という利益を説き、人々を目に見える欲望地獄に誘い込み、その結果その教団だけが〝この世太り〟して、そこに集まる信者は集金や集票の道具に利用されるだけ、という宗教が世間には沢山あるようです。

イエスは言われた。
わたしがこの世に来たのは、裁くためである。見えない者は見えるようになり、見えるものは見えないようになる。
―ヨハネによる福音書九章三九節―

〝目に見えている世界〟だけで満足している人に対して黙示録のヨハネは、次のような神の語りかけを記しています。

あなたは「わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要はない」と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。そこで、あなたに勧める。心底裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔いあらためよ。見よ、わたしはあなたの心の戸口に立って、叩いている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまたわたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。

―ヨハネの黙示録三章一七節以下―

イエスの言葉は、目に見えない根っこのそこから出ている。しかし私たちは枝や葉、花や実の見える世界で、イエスの言葉を聞く。この世を超えた根源の言葉を、この世の自我が生むただの知識や感情や意思で聞くなら、その理解はせいぜい〝宗教風〟の範囲内であって根がない。根が無い樹はやがて枯れる。だから、イエスは愚かな金持ちのたとえ話で言われた。「自分のために(見えるものだけに)富を積んでも、目に見えない霊的で永遠的な命のために豊かにならない者はこのとおりだ」と。まさに「聞く耳ある者は聞くがよい」(ルカによる福音書一八章三三節)

岩の上に建てられた家

イエスは言われた。

わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。

―マタイによる福音書七章二四節以下―

イエスは人生のあれこれの問題を語り、その問題に答えられたのではなく、人生そのものの土台の何であるかを提示されたのです。

イエスの言葉や業などが新約聖書の福音書に記されてあります。それらを注意深く見ますと、イエスの言葉や業が、ただ人の思いや考えから出ているのではなく、人の成り立ちの根源、つまり、わたしたちが生きている命の根元から出て、その命の何であるかを示していることに気づくのです。その意味で、イエスの言葉や業を見るとき、つまり聖書の福音書を読むとき、その命の根っこに気づかないままで、ただ、イエスの教えの字面(じづら)だけを「りっぱな教え」「ありがたい神の言葉」として読み、自分の人生を少しでも善く生きるための足(た)しにしようとするだけなら、そ

れは、イエスの言葉を本当に聞いたことにはならないと思います。また同じような態度でイエスの言葉や業について細かく研究しても、イエスが提示している命の根源の世界には開眼出来ないと思います。ましてや、イエスの教えを特定の教義(ドグマ)で固定した教えを盲目的に信じ込んで、その観点、視点から理解しようとするなら、それは、原理主義的キリスト教になってしまうのではないかと危惧します。事実「キリスト教会」が以上のようにイエスの言葉や業を取りあつかい、その結果、イエスが示された人間の根源的な命を失うことによって、極めて「世俗的な宗教」の一つになってしまったのではないかと思うのです。

―私が言う「世俗的な宗教」とは、イエスが提示した人間の根源的な命に開眼しないままで、ただ日常生活、または、この世の人生を善く生きるための、さらに、死んだ後の世で極楽や天国に行ける準備、又は手だて、助けにしようとするために用いようとするだけの宗教という意味であって、このようなキリスト教信仰のあり方を「継ぎ当てをする宗教」と言った人(ボンヘッファー)がいます。―

イエスの言葉や業は、"人の成り立ちの根っこ"を提示しているのです。

岩は初めから足元にある

イエスは、砂の上に建てられた家は、風や雨に襲われると壊れるが、岩を土台として建っている家は壊れることはないと言われた。この場合の家とは私たち一人ひとりの人生のことであり、

雨や風とは人生の様々な問題のことです。家の土台の岩や砂は人生の拠り所、または支えのことであり、人の成り立ちの根っこのことです。

人は、その家が大きいか、立派か、という見えるところに注目します。しかし、もっと大切なことはその家が何を土台にして建っているかということです。豊かな経済力と最新の技術、立派な色あいの知識と思想とで、一見強固のように思われる家を建てたとしても、その土台が不確かであるなら、その家は「愚かな人が建てた家」であるとイエスは言われる。そのような目に見えるものに依り頼む家を建てて満足するな！そんな家は人生の雨や風にいつまでも耐えることは出来ず、その家が大きく立派に見えれば見えるだけ倒れかたは悲惨だぞ！先ず、自分の人生を確かな土台の上に建てる賢い人であれ！とイエスは言われる。

このようなイエスの提示に、人は、「では、そのような土台は何処にあるのか」と尋ねます。また、「そのような確かな土台はどのようにすれば、自分のものにできるのか」と言います。

しかし、そのように尋ねる事自体が、はじめから間違っており愚かなことなのです。ハッキリ言うなら、そのような確かな土台は、この世の何処にもないのです。この世のいかなる知識も技術も、思想も、宗教も決して確かな土台となることは出来ないのです。この事をよくよく知っておられたイエスは、だからこそ立派な神殿、高僧による荘厳な宗教儀式が執り行われる神殿を指さして、「壊してしまえ」と言われた。（マルコ一四・五八）イエスにとって荘厳な儀式も難しい教義も聖なる律法（聖書の文字）も、聖人と称される人（たとえばモーセと言えども）も人間の救済の根拠とはならない事を知っておられたのである。しかし、この世の人の手に成るそれらを絶対の拠り所とする当時の宗教家達は、イエスの提示の何たるかに気づくことなく、単純に悪魔的な

異端者と見なし、神殿冒涜罪、律法(神の絶対的な言葉としての律法)に対する冒涜と違反の罪で神の名に於いて十字架に掛けて殺害したのです。

イエスは歴史的な内部から生じて来るどのような者も事も、人間の究極的な根拠ではなく、したがって本当の根拠にはなり得ないという、この世の、又は人間の限界点を知っておられたのです。

では、本当の命の根っこは何処にあるのか。イエスは言われる。「あなたの足元に既に躍動している」と。

ファリサイ宗の人々が、神の国(神による完全な救済)はいつ来るのか尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国(神による完全な救済)は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間(内)にあるのだ。

—ルカによる福音書一七章二〇節以下—

イエスにおいては、人間の、そしてこの世の根拠、根源、根っこ、究極的な支えは、「あすこにある」「ここにある」「やがて来る」と言うものではなく、既に、始めから、未来永劫の今、今、に命のたぎりとして躍動している「出来事」なのです。この出来事の事実を素直に提示されたのが次のイエスの語りです。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく、命のことでなにを食べよう

か、体のことで何を着ようかと思い悩むな。(神から与えられた、神が支えられる)命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。こんな小さな事さえできないのになぜ、ほかの事まで思い悩むのか。野原の花がどのように育つのか考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。ああ信仰の薄い者たちよ。……患い悩むな。……あなたがたの父(神)はこれらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ神の国(神の救いの働き)を求め(開眼し)なさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さき群れよ、恐れるな。あなたがたの父(神)は喜んで神の国をくださる。　　―ルカによる福音書一二章二二節以下―

一羽の鳥、野原の小さき草花の一つでも、そこに存在し、飛び、咲いているという事は、鳥自身や花の計(はか)らいによるのではなく、この世の繋がりによるのでもなく、究極的には、それがそこに在るべく在らしめている根源的な命の大決定によるのです。根源的な命の大決定は、生きよ！生きられる！必ず生かす！という神の命のたぎりのそこにあるのです。その命のたぎりが、「お前が生きているその脚下にあるではないか。ホラッホラ、足元にあってお前を生かしているではないか。事実、お前を生かして来たのはその命であり、今後も未来永劫(みらいえいごう)にお前を生かさずにはお

かないのだ！だからこそ、まず、その神の支配に開眼せよ！」とイエスは言われる。

どの人も、初めから岩の上に立っているのです。にもかかわらず、人は自分で自分を立たせなくては生きていけない、存在出来ないと思い込み、この世の何かを確かなものと成して、それに掴(つか)まり、それによって自分を立ち上げようとするのです。その意味で、イエスは律法(聖書の文字)に掴まるな、荘厳な神殿とそこで行われる有り難い儀式に掴まるな、さらに誤解を恐れずに言うなら「十字架」にも掴まるな！と言われるのです。さらに、「これこそ真理である」とするこの世の主義や主張、宗教的な教義(ドグマ)にも掴まるな！と言われる。なぜなら、この世のものはすべて根源的に、すでに在るべく在らしめられ、必ず生かす命のたぎりの中から生じた相対的な一つにしかすぎないからです。

この世の意義

イエスはこの世を否定するようなことはなさらない。むしろ、この世の素晴らしさを語られた。大空に羽ばたく鳥、野に咲く花を語るとき、そこに神の大いなる命の祝福をイエスは見られた。イエスにとってこの世は、神の命と御心の反映なのです。だからこそ、鳥や花を見てそこに神を見ておいでになる。それは鳥と神とを混同しておられるのではなく、鳥は鳥、花は花であって神ではない。それらはこの世のものとしての限界を持ってそこに在る。しかし、その限界を持つそのままで神を反映しているのです。そこに「もの」の素晴らしさがあるのです。したがって、

「物はただの物」なのではなく「物はものでありつつ物でない」ところに物の尊さがあるのです。この事実は物の秘密だと言えましょう。しかし、この世の人は「物はただの物だと」思い込むことによって、「物」の価値を貶(おとし)めてしまいました。それは人間についても言えることです。

「人間は人間だと」思い込むことは、人間を最も粗末にすることです。自分は自分だと考えることは、自分を最も粗末にしているのです。人間は人間以上の命によって人間にさせてもらっているのです。

この世はただのこの世だと思い込んでいるところから、軽薄な世俗主義が生まれ、偽善的な正義が起こり、浅薄なヒューマニズムが流行するのです。

旧約聖書創世記は、神が天地を創造なさったときのことを次のように記しています。

神はお造りになったすべての物をご覧になった。見よ、それは極めて良かった。

—創世記一章三節—

それは極めて「良かった」とは、創造されたものが、「目的にかなっている」(関根正雄)と言う意味です。つまり、この世にあるものは神の目的(願い)が秘められているのです。ものが物としてそこにただ在るのではないのが、この世の物です。

生きる秘訣

群衆を弟子たちと共に呼び寄せ、イエスは次のように言われた。
わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払いえようか。

―マルコによる福音書八章三四節以下―

× ×

イエスは人生のあれこれの問題を語り、その問題に答えられたのではなく、人生そのものの土台の何であるかを提示されたのです。
人生とは、自分が生きて来たこと、今、生きていること、生きて行くことです。イエスは、だれもが、喜びと希望を持ち、人間らしく命を輝かせて生きて行くことを願われ、その秘訣を示されました。「わたしに従いたい者」とは、〝わたしが生きている栄光ある命の道を一緒に進もうとする者〟という意味で、そのためには「自分を捨てなさい」と言われる。「十字架を背負う」ということも「自分を捨てる」と同義語です。すなわち、「自分を捨てる」とは、「自分の命を捨てる」ということです。

「自分の命を捨てる」とは厳しい言葉です。さらに、それにつづくイエスの言葉はすぐには理解できません。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」はたして、ここでイエスは何を語っておいでになるのでしょうか。

以下では、このイエスの言葉を、幾つかに分節しながら全体を、わたしの理解にもとづいて述べてみます。

自分を捨てるとは

先ず、「自分を捨てる」とはどういうことなのでしょうか。

私たちは、自分を捨てれば、自分のすべてが無くなってしまうと思っています。それは「自殺せよ」と言われているように受け取るのです。ですから、「自分は捨てられない！」と自分に固執します。が、まさにイエスは「自分は捨てられない！」「自分を捨てれば自分は無くなる！」と〝自分に固執するその自分〟を問うておられるのです。

それにしても、私たちは〝嫌な自分〟を意識するときがあります。一方、〝好きな自分〟を意識する事があります。嫌な自分は捨ててしまいたいと思いますし、好きな自分は受入れ褒めてあげたい、と思います。どうやら、捨てたいと思う自分と、受入れて褒めてあげたいと思う自分、つまり二つの自分があるようです。

”捨てたい自分“ ”嫌な自分“とはどのような自分なのでしょうか。それは、自分の損得だけを考え、他人から奪うことで自分を立てようとする利己的な自分です。一方、”好きな自分“ ”受け入れたい自分“とはどのような自分なのでしょうか。それは、他者のことも考え、共に幸いになれるように生きて行こうとする自分です。このように反省的に「自分」を見つめてみますと、二つの自分があるように思います。とすると、イエスが言われる捨てるべき自分とは、利己的な自分のことを言っておられるようです。

「自分」について考える

利己的な嫌な自分、他者と共に生きようとする好きな自分が、自分の中に働いているようです。とすると、日頃わたしたちが「自分」と称しているのはどの自分なのでしょうか。

私たちは自分について、それほど厳密に考えてはいません。先述のように”嫌な自分“と”好きな自分“ということも、何時も気づいていません。「言われてみると、そういうこともあるかなあ？」という程度のことで、日常の意識の領域に於ける中心は「利己的な自分」です。その利己的な意識の中心に息づいている自分を「自我」と言うのです。ですから、一般的には、その「自我」を「自分」だと思っています。そのような自分は「自分は自分だから自分なのだ」と単純に自分を肯定しています。勿論その場合、「自我としての自分」が善か悪か、などということは問いませんし、問おうとも思いません。それに対して”他者と共生する事を自然とする自分“

のことを「自己」と言うなら、そのような「自己」について「自我」は気づいていません。しかし、後で述べますが、「自己」こそ意識と無意識とを含めた、わたしたち人間の心の世界の中心であり、「わたし」と言う存在の全体なのです。

自我と自己

利己的な意識の中心に息づいている自分を「自我」と言い、その自我が「自分」であると、言いましたが、ここで、もう少し、その自我の有り様を考え、その後で、自己について考え、最後に、自我と自己との関係を最初に紹介しましたイエスの言葉に則して考えてみましょう。

ここで、自我と自己と肉体との関係を船に譬えて語った例を紹介しておきます。つまり、自我とは船の舵であり、自己は船長、そして船体が肉体だというのです。この譬えを用いて自我について考えてみます。

先ず、私たちは「自我自体」は捨てることは出来ない、ことを知っておきましょう。つまり、船には必ず舵が必要です。というのは、人は自意識を持っています。そしてその自意識は感じたり、考えたり、決断したり、語ったり、しかるべき行動へ自分自身を方向づけます。つまり、舵の働きをする。このような自我の働きは、私がこの世で生きて行くため、又、存在するためには必要です。しかし、そのような自我だからこそ、自我は歪み始めるのです。即ち、自我こそ自分の主人なのだと錯覚してしまうのです。船を方向付ける舵が、自分があたかも船長であるかのよ

うな錯覚をしてしまうのです。即ち、「自分は自分によって自分である」「自分は自分以外のなに者でもない」と確信してしまう。これは倒錯の自我自意識であり、「歪んだ自我」だと言えます。舵や船体の主人は船長です。そのことを無視し、舵自身が船長であるかのように思い込んでしまう。まさに、これこそ、ことがらの当然あるべき正しい順序、または位置と正反対になってしまう〝倒錯〟にほかなりません。このよう自我の様態をわたしは〝歪んだ自我〟と言う。この自我が辿る方向性は自分を無限に拡大して行く有り方であり、欲し、求め、望み描く自分を貫徹完成することです。そして、その為には自分が関わる一切のものを手段化してしまう。つまり、歪んだ自我に於いては一切が自我拡大、自我貫徹の手段とするのです。神も仏も、慈悲も愛の行為も、正義も真理も自己犠牲も、信仰も宗教も文化も科学も芸術をも、勿論政治も経済も……その他、この世に存在する一切が自我貫徹の手段となってしまう。これこそエゴイズム（自我主義）の実体であり、それがもたらすものは、争い、破壊、壊滅、悲惨であり、最後は虚しさだけです。この状態は人間の歴史が証明しています。にもかかわらず、人間は同じ事を繰り返して止まない。ここに歪んだ自我がもつ病根の深さがあるのです。イエスは、そして聖書も、このような歪んだ自我の問題性を指摘すると同時に、本来的な自我、即ち本来的な人間のあり方を証示したのです。

ここで、もう少し、歪んだ自我の問題性を考えてみましょう。歪んだ自我の問題性とは何なのでしょうか。それは〝自分のみによって自分になろうとする有り方〟です。つまり〝自分で作りあげた望ましい自分になろうとすること〟です。その典型をイエスも使徒パウロも当時の熱心なユダヤ教徒であるパリサイ宗の人達の信仰の有り方に見られた。使徒パウロは言います。「わた

しは彼らが熱心に神に仕えていることは認めますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです」（ローマの信徒への手紙一〇章二節以下）と。パウロは、パリサイ宗の人達が、神を立て、聖書（律法）の文字を振りかざす熱心さが、実は、〝望ましい信仰人の姿〟を、自分の聖書理解で作り、その望ましい自分自身になることが、神が求める義しい人間になることだと、自分で思い込んでしまった、その熱心な自我のあり方の問題性を指摘されたのです。結局、彼らは神を自我で抱え込んでしまったのです。つまり、彼らの神は、自我にとって望ましい神であり、突き詰めれば、彼らの神とは、自我の観念が作り出した虚構の神にしか過ぎないのです。だから、自我の投影としての神を立て、その神を自分の主体としているということは、その神の実体は自我自身に他ならないといえます。それを「自分の腹に仕える」「彼らは自分の腹を神とし」とパウロは指摘しました。（ローマ一六・一八、フィリピ三・一九）このようなパリサイ宗の倒錯した信仰の在り方、宗教理解、神理解の問題性を見抜いたイエスは、彼らのその姿を、「偽善者！」と言われた。

偽善者とは、一般には、うわべを飾って（仮面を被って）心や行いが正しいように見せる者を言うようですが、イエスが言われる偽善者とは、本当の自分の支えとの交わりも、他の人格との関係も無視して、ただ神の律法（聖書）の文字面を一意的に受け、それに基づき望ましい自分の姿を描き、その望ましい自分を演じる者のことです。その姿を一口で言えば「律法主義者」と言うことになります。これこそ歪んだ自我が生み出す典型です。

結局、偽善者とは、全ての関心が自分自身にあるのです。自分の理想像を律法（聖書）の文字で

型作り、その自分を眺めている。その意味で偽善者、律法主義者はエゴイストです。つまり、彼にとって本当の自分の主体である神は欠落している。このようなパリサイ宗の偽善的な信仰理解、宗教理解をイエスは深く悲しまれた。

律法学者たちとパリサイ宗の人々、あなたたち偽善者は不幸だ！（マタイ二三・一三以下）

「不幸だ」とは、「あなたたちのことを考えると、私の胸は張り裂ける」と言う意味の言葉だと織田昭氏の新約聖書ギリシャ語辞典にある。イエスは、この悲痛なる叫びにつづいて、その理由を次のように言われた。

人々の前で天の国(神の支配)を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人も入らせない。

―マタイによる福音書二三章一三節以下―

歪んだ自我が生み出す最大の不幸は、人間の本来性を歪め、神による人間の創造に於ける自然を潰してしまうことです。

では、〝歪んだ自我〟に目覚め、本来の自我を人間が回復するためには、私たちはどうすればよいのか。冒頭に紹介したイエスの提示に基づいて、学んでまいりましょう。

本当の自分を求めて

私たちは、自分自身に向かって、

「おまえは、本当に自由に、自分の人生を生きているか！また、生きて来たか！」

と、問うてみたことがあるでしょうか。

ひょっとすると、合理的に整えられた現代社会の仕組みの中で、自分の物質的、肉体的な欲望だけを求め、表面的な人間関係を保ちながら、要領よく、狡猾に生きているのが自分ではないか、と思う。しかし、一方で、巨大な経済機構の中での、一つの歯車として、自分の個性を捨てて激烈な競争を強いられる生き方に対し、どの人も心の深いところにひそむ本当の自分自身は、寂しさと虚しさを感じ、不安と孤独に耐えながら日々過ごしているのではないでしょうか。その証拠に、年間三万人を越える自殺者、とりわけ壮年層の自殺者が多いと言う。この事実は、現代という時代がどれほど人間存在にとっての危機的状況であるかということを示している。

「わたしは、毎日、うその自分を演出して生きているのです」と、一人の若者はわたしに語ってくれました。また、「自分の本音を語れば、すべての人間関係はつぶれてしまいます」と、笑いながら語ってくれたその人の顔は、苦悩を秘めた自嘲（じちょう）の笑いでした。

子供から大人まで、男も女も、現代人は本当の自分を失い、潰され、また潰して、不安と苦悩の生を孤独に生きているようです。これが現代の人間状況だと言えましょう。

勿論、このような人間の状況を生ましめた原因を客観的な社会のありかたに求め、その資本主義的な制度の改革や変革を求めることによって、人間を解放するという立場もあり、その事自体は大切なことであって、それなりに努力すべきことであろうと思います。が、一方に於いて、この人間存在の危機的状況を深く人間一人ひとりの魂(精神)のありかたに求め、その人間精神の根源的な変革によって、人間がまさに本来的な人間となりうるとする立場があります。私たちがイエスに於いて見出すのは、この立場です。

新約聖書に於いてイエスが証示していることは、所謂「キリスト教」という一つの「宗教」の世界と、その「宗教」の自己主張、自己拡大のことではなく、深く人間存在を問うことによって〝人間が本当に人間と成る〟ということ、即ち、一人の人間として、自分を本当に生き、〝生きていることは、なんと素晴らしいことか。さまざまな苦しいことがあっても生きて行ける、生きて行こう、生きて行くのだ〟と本当に感じ思える自覚的な人生を、一人一人が得、その秘訣(命)に開眼するためであります。

だからこそ、先にも紹介したとおり、イエスは次のように示されました。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命(本当の自分)を失ったら何の得になろうか。

―マルコによる福音章八章三六節―

本当の自分を失っている人間状況が、まさに〝今の私の姿である〟と言えます。とすれば、本当の自分を取り戻すために、私たちはどのようにすればよいのでしょうか。私たちは先に紹介し

ましたイエスの提示(マルコによる福音書八章三四節以下)にもとづき、それを「自我と自己」との関係で少し学んできましたが、その学びをもう少し進めて行きましょう。

再び「自我と自己」について

イエスは、「わたしに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」と言われた。「わたしに従いたい者」とは、「わたしが生きている栄光ある命の道を一緒に進もうとする者」という意味であって、ただイエスを妄信し、そのイエスに掴まって、ということではありません。歴史の中に現れた一人の人間であるイエスを、妄信してそのイエスだけに掴まって生きることは、イエスを偶像化した在り方であり、それは、様々な「宗教」又は「主義主張集団」(政治的、国家的集団)で起こっている教祖、又は特定の人物を絶対化し、それによって統一化される一種の偶像礼拝だと言えましょう。

イエスが「わたし」と言われるとき、歴史的な存在としての「わたし」ではありません。歴史的に限定された人間イエスに於いて証示された〝真実そのこと〟即ち〝真実の命〟それは、ヨハネによる福音書の表現によると「ロゴス」(ヨハネ一・一以下)であり、その顕在化が「キリスト」と呼ばれ、イエスはそのキリストを自ら行じられたのです。その意味で「イエスはキリスト」なのです。そのような「キリスト自体」を、イエスは「わたし」と言われた。だからこそ「わたしを見たものは神(真実の命)を見たのである」と言われる。(ヨハネ一四・六以下)だから、

この場合のイエスに於ける「わたし」とは単なる「イエスの自我」でないことは明らかです。しかし、それを聞いた人々はイエスが肉体的な自我自身を神格化したと理解し、イエスは神を冒涜する者と決めつけ、殺害しようとした。そして結果的にはイエスは十字架刑で殺害されました。（ヨハネ五・一八）

「私は神である」などとイエスは言われない。肉体を持って顕在的に存在したイエスは、私達と同じく、ある時、ある場所に存在し、ある時、ある場所で死んだ、紛れもなく一人の人間であり一つの自我体です。そのような相対的な存在を、いかなる意味においても絶対化し、ましてや神格化することは誤りです。その意味でイエスは「私は神である」などと言われない。それは、先に述べた「歪んだ自我」の思い上がり、虚構としての自我に他なりません。

イエスは言われた。「わたしの父（神）は今も働いておられる。だから、わたしも同様に働くのだ」と。（ヨハネ五・一七）「わたしも同様に働く」とは、イエスの自我が自分勝手に神（父）のように創造的な業をするのではなく、〝わたしの主体として働いているその命（キリスト）の働きに従って働く〟という意味です。そのことを、イエスは具体的に次のように言われた。

「わたしは自分（自我）では何もできない。ただ、父（神）から聞くままに判断する。わたしの判断は正しい、わたしは自分（自我）の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御意志を行う」（ヨハネ五・三〇）と。

これらのことをイエスはさらに次のように言われた。「わたしが父（神）の内におり、父（神）がわたしの内におられることを信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父（神）が、その業を行っておられるのである。わたしが

父(神)の内におり、父(神)がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。(ヨハネ一四・一〇)

ここで、イエスが「わたしが神の内におり、神がわたしの内におられる」と言われる意味は、神がイエスの中に住んでいる、という意味ではありません。つまり、イエスという存在があり、さらにもう一つの存在である神がイエスの中にいる、ということではない。また、イエスに神が憑依(ひょうい)する、つまりイエスに〝神がのりうつる〟ことでもない。そうではなく「内におる」(エン)とは「神はイエスの内に働く」ということ、「神がそのものに満ちている」ことを言う。(ギリシア語新約聖書釈義辞典　ハルツ／GZシュナイダー編)つまり、内に(エン)とは、この場合イエスが神に包まれ、神の働きの領域内に置かれていることであり、神に支えられ、神がそのものの存在の根柢であること。さらに言えば、神がそのものの生の主体となっていることを示すものだと言えます。

このイエスと神との関係を、さらにヨハネによる福音書から幾つか紹介しておきましょう。

「わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父(神)が、わたしの言うべきことを、お命じになった(委託された)からである。(ヨハネ一二・四九)

「父(神)よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいる」(ヨハネ一七・二一)

そして、イエスは、「主よ、わたしに御父(神)をお示しください」と願った弟子のピイリポに次のように答えられた。

「フィリポよ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た

者は、父(神)を見たのだ」と。(ヨハネ一四・八以下)

イエスは明らかに一人の自我体としての人間そのものであります。しかし、その自我体がイエスのすべてではありません。そうではなく、イエスの自我体の究極の主体が神なのであって、その究極の主体、つまり神の場から直接発語される「わたし」が、先に紹介したイエスの「わたし」ということなのです。この「わたし」が他ならぬ「自己」その事なのです。

しかし、その「自己」をイエスが「自我の世界」で言動表出する限り、イエスは神の啓示者なのです。

〔啓示とは、究極的な真理(神)が顕在的なもの(見えて在るもの)によって露(あらわ)されること〕

その意味で、イエスという歴史的な存在者(自我体)をとおして究極的な創造的主体である神(自己)が啓示されるといえる。が、究極的な創造的主体である神(自己)は、初めから終わりまで命のたぎりとして躍動しつづけているのです。この事実をイエスは「神は今に至るまで創造的な働きをしておられる」(ヨハネ五・一七)と言われた。神とは、静的な理念でも、哲学的な真理としての観念的な概念でもない。ヘブライ的な神とは〝創造的な命のたぎりとして「成る」命のたぎり〟その事なのです。このような創造的な命のたぎりを、イエスは「神の支配」と言われた。そしてその神の支配は「ここにある。あそこにある。と言えるものではない。実に、神の国はあなたがたの中にある」と示された。(ルカによる福音書一七・二〇)

このように、神の創造的な命のたぎりは、その者が知る、知らないに関係なく万人の根柢に及び、包み支えている根源的な命の場なのです。それ故にこそ、万物は存在し成るのです。この源事実に基づいて、その源事実の創造的な命のたぎりを露(あらわ)に生きたのがイエスなのです。このよ

うなイエスの生きざまをパウロは次のように語りました。「自分（自我）を無にして、へりくだり、死にいたるまで、それも十字架の死に至るまで従順であった」と。

それはイエスが神の創造的な命、つまり神の支配、即ち「自己」である神を「わたし」として行じたということであって、それは「自我」から発する倫理的な努力や道徳的に律法（文字としての聖書の言葉）を遵守したという「従順」ではありません。イエスは創造的な命のたぎりなる「自我の究極的な本当の主体である父なる神」の場、即ち、すべてを包み、支え、あるべきものへと完成せずにはおかない、「神の創造的な支配の働き」が、自我体としての肉なるイエスの意志と意欲に反映し、「われ成さねばならぬ」ではなく「われ願う」という命の世界に聖霊によって生かされたのがイエスの「従順」だったのです。

結局、イエスは「神の支配」を語っただけでなく、神の支配（自己）を自らの身（自我体）において行じることにより、神の支配を露（あらわ）にされたのです。それは「本来の自我」の現れだといえます。だからこそ、イエスの言動に接するとき、そこに〝本当の人間としての自分〟が生きていることに気づくのです。そして誰もが自然に、イエスの生きざまに共感し、愛と慰めを覚えるのです。次に「パウロに於ける自我と自己」について学ぶことで、神と私たちとの関係を考えてみましょう。

なぜ自我と自己か

イエスやパウロの生き方を問うていますと、生きている根っこに安心が見えて来て、希望をもって死を乗り越えて行ける命の秘密に目覚めることが出来るようになります。

そのような意味でイエスやパウロの生き方を問う問い方の一つに〝自我と自己〟という観点があります。〝自我と自己〟というと難しく聞こえますが〝自我を物、自己を心〟というふうに置き換えるなら、物(体)と心との関わりをどのように理解するかということになります。なぜなら、私たちの人生は毎日物と心との関わりの連続だからです。何を食べようか何を飲もうか、何を着ようかと、わたしたちは物としての自分の体のことで日々思い悩みます。(マタイによる福音書六・二五)

また、〝自我と自己〟とを〝見えるものと見えないもの〟ということに置き換えますと、見える現在と見えない将来との関わりで、いろいろと思い計り、不安や希望や喜びや恐怖を持っています。さらに、自我と自己とは〝この世とあの世〟とに置き換えることも出来ますし〝生と死〟または、〝人間と神〟との関係にも置き換えることもできます。さらに、それは〝時間と永遠〟や〝相対と絶対〟という関係に置き換えることだってできます。とすると、〝自我と自己〟という関係を問うことは理屈のことではなく、私たちの生活にとても身近な事柄なのであります。だからこそ〝自我と自己〟の関係を問うことは、私たちが人生を安心して生きて行くためには大切

なことがらだと言えます。

パウロに於ける自我と自己

パウロは誠実な人間でした。彼はユダヤ教徒として、神の前に義(ただ)しく生きるために旧約聖書の教え(律法)を、当時の同輩の誰よりも熱烈に、且つ完全に守って生きていました。しかし、後日、彼はそのような生き方の間違いに気づくのですが、その間違いとは、一言でいえば、〝歪(ゆが)んだ自我による生き方〟ということです。

〝歪んだ自我による生き方〟とは、神をほんとうに知らないままで、また、聖書の言葉(律法)の本当の意味を知らないままで、ただ、聖書の言葉(律法)をその文字に従って熱心に守ることで自分を神の前に安心させようとする生き方です。つまり、「聖書にそのように書いてあるから」という理由だけで、目に見える聖書の文字を頭から盲目的に神の言葉、又は絶対の基準であると自我で信じ思い込み、受入れて、神の前に自我が望ましいと思い込んだ自分の姿を造り上げ、その自分の生き方を〝聖書的、聖書的〟と唱えながら、それによって自分(自我)を義人として立ち上がらせようとする、律法主義的自我貫徹の生き方の間違いにパウロは気づいたのです。そのような律法主義を克服し、神の真実の命(キリスト)に開眼した後で、律法主義者として生きていた自分の姿を語ったのがローマの信徒への手紙七章七節以下二五節のパウロの言葉です。

ローマの信徒への手紙七章七節以下二五節のパウロの言葉は、キリスト者としてのパウロの真

剣な罪の告白であると解釈する人たちがいます。しかし、彼の告白を注意深く読んでみますと、彼が語っていることは、先にも述べたとおり、本当の命(キリスト)に開眼せず、また本来の自我に目覚めないままで、歪んだ自我によって聖書(律法)の言葉を熱心に守ることで自我実現、自我完成しようとしていた教条主義者、律法主義者である自分の在り方に気づいたということです。ですから、自分が律法遵守に熱心になればなるほど自我が肥大して、神から離れる傲慢という罪の支配に自分を貶(おとし)める結果になってしまった、というのです。そのことを彼は次のように告白しました。

わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。〔即ち、神の命(自己―キリスト―)を知らないままの歪んだ自我の働きなのです。〕

―ローマの信徒への手紙七章一九節以下―

とにかく、パウロが神の命(キリスト)に開眼することによって気づいたことは、「聖書(律法)!聖書(律法)!」「救い!救い!」「神!神!」「悔い改め!悔い改め!」と、どれほど熱心に叫んでも、それが目に見えるもの(例えば聖書の文字)を、絶対化し、それに寄り頼むことで自分を救い上げる保証とすることは、所詮は自我の欲求の一つの働きにしかすぎないのだ!ということです。この一点に開眼することはとても大切なことです。重要なことは、自我よりも深い命(パウロの場合はキリスト)から生かされることです。その命に開眼するとき、自分の在り方が、

歪んだ自我からのそれか、自我よりも深い命からのそれか、ということが自ずと了解出来るようになるのです。そのときパウロは、それまで救いのための最も大切な律法遵守を、塵だ！糞だ！と言い、〝律法の文字遵守は人を殺す！〟と言ったのです。（コリント三・六）彼が言いたかったことは、律法（聖書）の文字を守らないから、又は信じないから人は救われないのではなく、神の命（キリスト）に与かり、開眼し、その命に本当に生かされないままで、律法（聖書）の文字に寄り頼み、それを妄信し、それを振りかざすから、結局救われることはないのだ！と言うのです。それが歪んだ自我の働きであり、信仰の落とし穴なのです。このような自我を出発点とする熱心についてパウロは次のように言いました。

兄弟たち（信仰熱心な方々よ）、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識（神の意志に基づく悟り）によるものではありません。なぜなら、神の義（神との正しい関係において与えられる神の命の智恵）を知らず、自分の義（自我が生み出す正義の智恵）を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

―ローマの信徒への手紙一〇章一節以下―

この一点は、キリスト者ばかりか、広く正義を叫び、真理を求め誠実に生きようとしている人達が、謙虚に反省すべき事だと思います。しかし、自我で抱え込んだ熱心に気づき、そこから抜け出すことは、至難の業だと思うほどに頑迷です。それどころか、そのような自我からの解放を

提示する者を「悪魔の誘惑者」であるかのように敵視し、排除し、抹殺し、無視しようとします。イエスはそのような頑迷な教条的ユダヤ教徒により十字架刑に処せられたのです。このような人達がいつの時代にも「正統」という名のもとで、真実で霊的な先駆者をどれほど抹殺して来たことか人間の歴史が証明しています。

歪んだ自我が生み出す熱心な信仰や主義主張は、人間の本来性を潰し、独善による狂気に善良な人を誘い込むのです。これについて、イエスは、痛烈な批判をなされた。

禍だ！お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは、人々の前で天の国の〔扉を鍵で〕閉じてしまうのだ。なんと、お前たちは自ら入ることをせず、入ろうとする者たちをも入らせないのだ。

禍だ！お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは海と大陸を駆けめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまくいったときは、彼をお前たちに倍するほどの地獄の子にしてしまうのだ。禍だ！お前たち盲目の道案内人どもよ！

―マタイによる福音書二三章一三節以下―

ここに、自我と自己の在り方を問う理由があるのです。

では、パウロがみずからの歪んだ自我に気づき、その生き方から彼を解放させたものは何だったのでしょうか。

パウロは、自分の求道が最後に到達した世界を次のように語っています。

わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。

―フィリピの信徒への手紙一章二一節―

彼は言う。〝わたしが日々刻々と生きているのは神の命（キリスト）の働きその事である〟と。パウロが「キリスト」と言うとき、それは、歴史的に存在した人間イエスのことではなく、復活に於いて露（あらわ）になった〝神の命の働きその事〟であり、それをパウロは「霊なる主」と表現している。（コリントⅡ三・一七）だから、彼は次のように言います。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子（キリスト）に対する信仰によるのです。

―ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節―

つまり、「肉体をもったこの世のわたしの生は、私の自我によるものではなく、自我より深い神の命の働きに支え担われているのであって、いかなる意味に於いても自我が自分自身の主人（主体）ではなく、神の命の働きその事（キリスト）がわたしの一切の存在の主人（主体）なのである」と彼は言う。そして、この自我を支え担っている神の命の働きそのことを〝真実の「自己」〟と言うのです。それは、自我が生み出す想像や願望や理念としての原理ではなく、パウロ

の生に即した〝根源的な命のたぎりその事〟即ち、自我の本当の主体である〝「自己」その事〟であって、その〝自己〟に開眼することを「直接経験」と言うのです。この直接経験をパウロは、次のように語りました。

神が御子(キリスト即ち、神の命の働きその事である霊なる主・真実の自己)をわたしの中に啓示することをよしとされた。

―ガラテヤの信徒への手紙一章一六節―

彼はこのように歪んだ自我が生み出す〝律法の文字に即して自我完成しようとする生き方〟を「文字(律法)は人を殺す」と言い、一方、神の命の働き即ちキリストなる〝霊なる主〟(人間の本当の主体)が「人間を栄光から栄光へと復活のキリストと同じ姿に造り変えていく」と言う意味で、神の「霊こそが人を生かす」と、パウロ自身の生に即した霊的直接経験を通して明言したのです。(コリントの信徒への手紙Ⅱ三章四節～一八節)

パウロの直接経験と贖罪信仰（一）

パウロは、自分の生を支える本当の命の働きが自我より深い神の命の働きその事にあるという事実に、彼は、復活のキリストを通しての啓示体験、即ち直接経験に於いて開眼させられたのです。

一方彼が原始教団から受け継いだ〝イエス・キリストの十字架に於ける贖罪〟を、彼のキリスト体験(復活のキリストを通しての啓示体験)によって、より深め、再解釈することでイエスが提示した真実を世界に向かって普遍化する扉を開いたのです。以下において、その真実を「自我と自己」との枠組で考えてみたいと思います。

「パウロの直接経験」を考える前に、直接経験とは何かを了解しておきましょう。

「直接経験」とは〝そのものとの間に隔てる何もなく、そのものをそのまま体験的に知ること〟です。

私たちは物事と関わるとき、社会一般が共通して持っている考えや個人的な好みや利害得失という色眼鏡を通して関わっているのであって、そのものと〝そのまま〟直接に関わってはいません。このことについて私たちは日頃気づいていない。

例えば、身近にある「花」を見るとき、わしたちはそれを素直に、それに即して見ているでしょうか。

「これは○○という花だ」「○○頃に咲く花だ」「原産地は○○である」「花屋では○○の値で売っている」「私はこの花が好きだ(嫌いだ)」……などと、花に名を付け、類型化し、価値付け、社会的経済的な生活の中でその役割を与えられた花を楽しむ対象として利用し、関わります。その結果、利用価値がなくなると、ポイ!と捨てて一向に省みない。そして、「欲しければ、また買えばよい」と思う。とするなら、私たちが出会った〝その花〟は何だったのでしょうか。ひょっとすると、〝花そのもの〟と出会ったのではなく、一般に「花」と呼ばれ、価値付けられ、人の好みで利用され取り扱われている対象物の一つと出会っただけで、本当は「花」そのものと